

曇りのち晴れ

「旅をしている。冒頭のその一文は私にある一冊の絵本を思い起こさせた。『旅の絵本』というタイトルのその絵本には文字は一つもなく、旅人が丘を越え、川を渡り、自然いっはいの集落の中を通りながらはるばる旅している絵だけが描かれていた。その絵の中の空にはいつも雲がなかった。雲一つない青空とまっかな夕焼けだった。幼い頃からその絵本が好きだった私は、旅と聞くとその絵本の情景が目に見えかぶ。『旅をしている。』この一文

に出会ったときもそうだった。しかし、この本の中で二人の頭上に広がっていたのは雲一つない青空やまっかな夕焼けではない。曇天の空だった。人が旅をしたいと思うのはどんなときだろう。会いたい人がいるとき。綺麗な風景をみたいとき。気分転換したいとき。そして、現実逃避したいとき。人によつて旅をするきっかけはさまざまだ。幼い息子を突然失い、発作に気づけなかつた自分を責めるセキネさん

の旅は、初めは現実逃避をするための旅だ。た。それは同時にセキネさんと同じように自分を責める妻と違う日々を過ごすための旅でもあった。二人はそろって、同じように自分を責めて、同じように、心の片隅のどこかで、ほんの少しだけ、相手を責める。二人は釣り合いすぎていた。勾配のまったくない場所です。どちらへも流れない水は、やがて澱んで、腐ってしまふ。だからセキネさんは旅をしていた。明日香という青空の嫌いな少女とともに。

「雲を嫌うことないじゃん、ってこと。隅から隅までゼーンぶ青い空、ってほんとにきれいなわけ？ってこと。セキネさん、ってカンペキな青空を欲しがってるんでしょ、ってこと。でも、そんなの無理だよ。空のどこかに、雲はあるよ。見えなくても、どこかに絶対あるよ。」

私は青空が好きだ。だが、明日香のこの言葉は分かる気がする。嫌なことがあるときにみる青空はなんだか悔しい。明日香はセキネ

さんが前妻のもとに残してきた娘だ。母が余命宣告を受けてからセキネさんと旅をしている。奔放な母と次々と変わる新しい父との間で明日香はいつも孤独だった。しかし彼女は自分がひとりぼっちであることに感謝している。ひとりぼっちだ。たおかげで強くなれた。母親が死んでも生きていけると。どこまでも青空が続かないことを知っている彼女だからこそできることだ。私はどうだろう。心のどこかで、私の見ているこの雲一つない空がどこまでも続いていると信じている。カンペキな青空を欲しがっているのだ。私はまだ青空の嫌いな少女になれずにいる。

曇天の空しか知らない明日香と雲一つない青空を追い求めるセキネさんは旅を続ける。セキネさんの旅は回数を重ねる度に現実逃避の旅ではなくなっていた。圧倒的な風景に向き合い、その土地の人々と出会ううちに、息子の死との向き合い方は変わってゆく。一方、明日香は余命宣告された母の運命と懸命

に向かい合おうとしている。「死」と向き合
 おうとする二人の悲しみは似ているようで、
 違う。セキネさんの悲しみはもう死んでしま
 った人を思う悲しみ。明日香の悲しみはこれ
 から死んでいく人を思う悲しみ。セキネさん
 には明日香の悲しみを理解することはできな
 いし、明日香もセキネさんの悲しみを理解す
 ることはできない。しかし、二人はお互い
 「死」との向き合い方を必死に模索している
 ことを知っていた。その姿は、青空を追い求
 めるセキネさんに、ときには曇天の空がある
 ことを教え、曇天の空しか知らない少女に、
 雲一つない青空があることを教えた。そうし
 て二人は旅を続ける。
 しかし、旅の終わりはやってきた。「また
 いつか」そんな言葉を交わして別れた二人は
 しっかりと前を向いている。「私たちの旅は
 その瞬間、終わった」。その一文でこの本は終
 りを告げた。だが、もし次のページがあると
 するならば、「旅をはじめめる」。この一文がふさ

わしい。きつとその旅に終わりはない。ずつと続いていく。旅の途中でまた二人が死んだが二人なら前に進める。私は自信を持ってそう言える。

本を読み終え、もう一度旅の絵本を開いてみた。なぜか私の目に旅人が悲しそうに映った。そして青空は遠くの方に雲があるように思えた。だが、不思議と最後のページの旅人は頼もしく、力強く見えたのだ。その旅

人をまっかな夕焼けが優しく包みこんでいる。その絵を見て、ふと思った。セキネさんと明日香の旅の最後はどんな空だっただろうか。と。二人の旅はずっと曇天の空だった。だが、らこそ、最後は雲一つない青空だった。私は思う。青空の嫌いな少女もそのときだけは青空を好きになつてくれた気がする。またいつかそう言った二人をどこまでも続く雲一つない空が包みこんでいる。カンペキな青空が私の中に広がっていた。